

中国における作業療法の現状と作業療法士養成教育に関する研究

宮前珠子 ^{*,1)}、小川恵子 ¹⁾、顧寿智 ¹⁾、山田美代子 ²⁾

¹⁾ 聖隷クリストファー大学、²⁾ 静岡英和学院大学

目的：中国北京市にある中国リハビリテーション研究センターは、中国の代表的なリハビリテーションセンターであり、1980年代後半～1990年代前半にかけて、日本国際協力事業団の支援により設立され、中日友好病院附属衛生学校に設けられた1回限りの養成コースにおいて約30名の作業療法士が養成された。現在もその修了生が作業療法士として臨床に携わっている。世界の作業療法界では1990年代半ばから後半にかけて、作業療法のパラダイムシフトが起きている。今回は、このセンターで働く作業療法士が、現在どのような介入を行っているかアンケート調査を行い、その背景として用いている理論、技術及び概念枠組みを明らかにし、また作業療法の課題を明らかにすることを目的とした。

方法：2011年12月26日（月）、本センターを訪問し、その日にセンター作業療法室で勤務もしくは研修していた作業療法士を対象としてアンケート調査を行った。調査への参加、および提出は自由であることを伝え、協力に同意したもののみ提出するよう依頼した。内容：回答者の属性、担当患者の診断名、作業療法プログラムとして過去1ヶ月に行った内容、ADL、手工芸、音楽、スポーツ、レクなど該当するもの、知っている作業療法理論、使っている作業療法理論、使っている評価法、事由記載：作業療法士になって良かったと思う点、残念に思う点、その他の希望。

結果：40名（男性12名、女性28名）から回答を得た。経験年数は1年から24年、内訳は20年代6名、10年代4名、5年～7年5名、4年8名、3年4名、2年3名、1年10名であった。うち4名が上記の中日友好病院衛生学校出身、22名が現在リハビリテーションセンター構内にある首都医科大学出身、その他は各地の養成校出身であった。担当患者の診断名は、全員がCVAを担当、ほぼ全員が脊髄損傷を担当、頭部外傷は7割以上が担当、高次脳機能障害は約40%が担当し、次いで手の外科、パーキンソン、切断、発達障害が多かった。プログラム内容は、ADLは食事と更衣動作、書字訓練がほぼ全員に行われ、次いでパソコン、整容、炊事、入浴、トイレ、掃除などの順に多かった。手工芸は、編み物が約9割、紙細工が約8割の回答者が用い、ゲーム・レクリエーションでは、囲碁およびトランプが約6割、将棋と歌が約3割の回答者に用いられていた。社会技能訓練としてはコミュニケーションは約8割の回答者が行い、上肢機能訓練は全員行っており、ROM、筋力、サンディング、つかみはなし練習の順に多かった。使っている理論、枠組みは、ボバース、ブルンストローム、ICF、PNFはほぼ全員、ICIDHは約4割強、カナダ作業遂行モデルは約4割、人間作業モデルは3割弱であった。評価法は、ROM、筋力、ADL、片麻痺グレード、ミニメンタル、感覚順に多く、作業機能自己評価は10名、COPM8名、AMP S 1名であった。

考察：今回の結果から、現代化した作業療法理論はある程度知られていること、しかし行われている介入は医学モデルのものが多くことが明らかになった。

発表予定：作業療法教育研究 2012年10月発行予定